



Title	間接受身に関する通言語学的一考察
Author(s)	スミス, 山下 朋子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学留学生センター研究論集. 2007, 11, p. 15-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50662
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

間接受身に関する通言語学的一考察

スミス 山下 朋子*

要 旨

本稿は、日本語の間接受身の現象を通言語学的¹データと比較、分析したものである。間接受身の特殊性として、(1) 持ち主の受身、(2) 自動詞の受身、(3) 被害の意味という3つの論点に絞り考察した。まず、「持ち主の受身」に関しては他の言語にも多く見られる現象であると確認された。次に「自動詞の受身」は、人称と非人称受身に分類され、日本語には見られない非人称の自動詞ベースの受身の方が通言語学的には多く存在し、日本語やインドネシア語に見られる人称型は特殊であると見なされた。最後に、間接受身に特徴づけられる被害性に関しては、他の言語において、間接受身のみならず直接受身にも多く表れる現象であることを指摘し、被害性は受身構文そのものの特徴のひとつではないかと結論づけた。

【キーワード】間接受身、通言語学、持ち主の受身、自動詞、被害性

1 はじめに

日本語の間接受身は、対応する能動文をもたない受身構文であり、意味的には述部で表される出来事により主語が被害を受けることを表すことが多い。特殊な文法構文として扱われ、これまでに意味・機能等、数多くの先行研究がなされてきた(寺村1982, 久野1983, Shibatani 1990, Tsuboi 1997, 高見・久野2000a,b,c, 鷲尾 2005等参照)。

本稿では言語の系統を超えた複数のデータを用い、通言語学的にその特殊性について考察を試みる。基本的に間接受身は特殊な構文であると言って妥当であろうが、そのような言及のみでとどめるのでは分析が十分でないと思われる。重要なのは、間接受身の要素の中で特殊であるものとそうでないものを明確にしていくことではないだろうか。そうすることによって、日本語における受身そのものの体系の認識が一步進むという意味でも意義がある。さらに、日本語教育において実際に間接受身を指導する際、他の言語にも同様の構文があることを指摘することは有益であると思わ

れる。

受身構文は、多くの言語にわたって研究がなされており、言語の基本的・中心的な構文として扱われているようである。しかしながら、実際は受身構文を持たない言語も少なくないことも明らかになっている(Siewierska 1984, Keenan 1985)。Haspelmath (1990) は80の言語サンプルの中で31の言語しか受身構文を持たないことを報告しており、受身構文は有標である可能性が高いと提案している。この様な通言語学的な受身構文の位置付けは、十分認識しておかなければならないことだと思われる。

2 受身構文の分類

受身構文の形態・機能・意味は、言語によってかなり違いが見られるが、対応する能動文があり、意味上の目的語が文法上の主語となるタイプ、すなわち直接受身が多くの言語に存在しており、受身構文の典型例と見なすことができるであろう(Keenan 1985)。日本語には(1)のような直接受身が存在するが、その

* 大阪大学留学生センター非常勤講師

他にも(2)から(4)のような間接受身と呼ばれる受身文も見られる。

- (1) 太郎が花子に殴られた²。
- (2) 太郎が花子に日記を読まれた。
- (3) 太郎は隣の花子に一晩中宴会をされた。
- (4) 太郎は隣の子供に一晩中泣かれた。

間接受身を分類する場合、幾つかの観点がある。統語論的にみて大きく2つ、「ヲ格残存受身」と「自動詞の受身」とに分けられる(金水1993)。例文(2)、(3)がヲ格残存受身に属し、例文(4)が自動詞の受身に属する。また、意味論的に見て(2)は「持ち主の受身」、(3)と(4)は「第三者の受身」と分けることもできる。意味論上でさらに重要な点は、間接受身は被害や迷惑の意を表すことが多いということである。それは自動詞の受身のように基本的に構文自体の意味である場合もあるし、持ち主の受身のように文脈や動詞の意味による場合もある³。

本稿では間接受身の特殊性として(1)持ち主の受身、(2)自動詞の受身、(3)被害の意味という3点を中心に議論を進める。

3 持ち主の受身

間接受身構文の中でも、持ち主の受身は、幾つかのアジアの言語に見られることが先行文献でも指摘されており(ニラタワット1980, Siewierska 1984, Shibatani 1985, 湯浅 2000)、それ程特殊な構文とは言えない。

ベトナム語

- (5) *Nam bi cảnh sát tịch thu*
Nam 受身 警察 没収する

radô cua nó.

ラジオ 属する 彼

ナムはラジオを警察に没収された。

(Siewierska 1984: 155)

北京語

- (6) *Wo bei tacong shenshang*
私 受身 彼から (私自身) 体

toule shoubiao.

盗んだ 時計

私は彼に時計を盗まれた。

(Hashimoto 1988: 334)

タイ語

- (7) *Sudaa thùuk khə mooy khin baan.*
スダ 受身 泥棒 入る 家
スダはうちを泥棒に入られた。

(Siewierska 1984: 156)

インドネシア語

- (8) *Kenji dipukul kepalanya oleh Hiroshi.*
憲二 殴られた その頭 によって 広志
憲二は広志に頭を殴られた。(湯浅 2000:18)

英語とフランス語などでは、上の例文で述べられている意味内容をいわゆる使役構文が表しているが(Shibatani 1985, Washio 1993)、(9)や(10)のような文を一種の受身構文と扱ってもよいという考え方もある(Siewierska 1984)。

- (9) *John had his watch stolen.*

- (10) *Jean s'est fait voler sa montre.*

また英語では、have構文だけでなく、get構文でも受身的意味を表すことがある。

- (11) *John got his wallet stolen by a pickpocket.*

Getは、英語で受身構文にも使われている助動詞である。Givón and Yang (1993)は、getの受身構文が、おおむね以下のように再帰使役文から発達してきたものだとして提案している。

(12) *She got herself to be admitted.*

(13) *She got to be admitted.*

(14) *She got admitted.*

同一の形式が使役と受身構文として用いられるという現象は特に珍しいものでもなく (Hashimoto 1988, Haspelmath 1990)、例えば韓国語や中国語では同一文が使役とも受身とも解釈できることもある (Washio 1993, Park 1994)。(15) は韓国語からの例であるが、文脈によって使役とも受身とも受け取れる (Park 1994:188)。

(15) *Amma-ka aki-eykey cec-ul mul-li-essta.*

母は 赤ん坊に 胸を 嘔む・含む・使役・過去

a. 母親は赤ん坊に乳をあげた。

b. 母親は赤ん坊に乳首を嘔まれた。

(Kim 1994:333)

以上のように、英語、フランス語、韓国語において使役が受身の意味を表すケースに共通するのは、どの出来事も主語の意思とは裏腹に行為が成立してしまい、主語が何らかの被害を被っているということである。そして、使役構文が被害の意味を表す場合は、少なくとも意味的受身として扱って問題ないと思われる。従って、間接受身の中でも持ち主の受身は他の言語にも類似構文が存在しており、それ程特殊なものではないと判断できるのではないかと結論づけられる。

4 自動詞の受身

4-1 自動詞ベースの人称受身

一般的に、日本語のような自動詞の受身は通言語学的にみて珍しいとされている。日本語の自動詞の受身は、第三者の項が文の新主語として現れることが特徴である。このタイプの受身を自動詞ベースの人称受身という (柴谷 1997)。

(16) 雨が降った。 → 太郎は雨に降られた。

(17) 客が突然来た。 → 花子は客に突然来られた。

現時点で、同様の受身構文を持つとはっきりわかっている言語は、管見ではインドネシア語のみである。インドネシア語では、共接辞 ‘*ke-an*’ による受身文が以下の例文のように日本語の自動詞受身に対応している (湯浅 2000: 13)。

(18) *Taro kehujaan.* ← *Hujan.*

太郎 雨に降られる 雨が降る

太郎は雨に降られた。 雨が降った。

(19) *Aku kematian anak(ku).* ← *Anak(ku) mati.*

僕 死なれる 子供 子供 死ぬ

僕は子供に死なれた。 子供が死んだ。

(20) *Dia kedatangan tamu.* ← *Tamu datang.*

彼 来られる 客 客 来る

彼は客に来られた。 客が来た。

このような受身文は、日本語の受身文と同様、ある出来事から第3者の主語が利害 (ほとんどの場合は被害) を受けるという意味構造の特徴を持つ。

同様な構文の可能性として北京語も挙げられる。Hashimoto (1988: 335) には、北京語でも自動詞の受身が存在すると例文が1つ紹介されている。このタイプの受身がどの程度表現できるのか、更に北京語を調査しなければならない。

(21) *Kanshou bei fanren paole.*

看守 受身 罪人 逃げる

看守は罪人に脱走された。

また、Shibatani (1990) によると、ベトナム語にも日本語と同様の受身文が存在するということである。しかし、「赤ん坊に泣かれた」や「父親に死なれた」のような受身文は非文であるというベトナム語話者もあり⁴、さらに詳しい調査が必要であるが、ベトナム語では日本語やインドネシア語と違い自動詞の受

身は極めて限られた現象であるのかもしれない。

4-2 自動詞ベースの非人称受身

日本語やインドネシア語に見られる自動詞ベースの人称受身は非常に少ないと思われるが、自動詞の受身自体はそれほど珍しいものではないようである。指示的主語を持たない、いわゆる非人称受身と呼ばれる受身構文では(22)、(23)のように自動詞ベースの受身文も多く存在する。例えばドイツ語の場合、*wurden* (なる) と自動詞の過去分詞形で受身文がつけられ、トルコ語では受身のマーカー、*-n*が付いている。

ドイツ語

- (22) *Gestern wurde getanzt.*
昨日 なった 踊る
昨日踊りがあった。

トルコ語

- (23) *Burada oynanır.*
ここ 遊んだ
ここで遊びがあった。

自動詞ベースの人称受身と非人称受身の共通点は、直接受身と同様、(i)受身の形態素ないし構文要素が含まれ、(ii)動作主が主語として出現しないことである。反対に相違点は、自動詞ベースの人称受身の方には(i)新しい項が増えていることと、(ii)被害の意味を含むということである。

非人称受身は人称受身よりも起こりにくいと言われているが、ドイツ語、オランダ語、ノルウェー語、ラテン語、ロシア語の北方方言、トルコ語、ユート語、ショーナ語(バントゥー系)など、幅広い言語に見られる(Siewierska 1984, Keenan 1985, 柴谷1997)。しかしながら、自動詞ベースだけで考えると、自動詞ベースの人称受身は、日本語、インドネシア語など限られた言語にしか見られないことから、自動詞ベースの非人称受身が自動詞ベースの人称受身よりも起こりやすいと考えてよいと思われる。

4-3 英語における自動詞の受身

一般に詳細な英語学や言語学の研究ではない場合、英語には自動詞の受身はないと言われることもあるが(ニラタワット1980)、実際は例外的に英語の自動詞の受身も存在する。Davison (1980)が指摘するように、一定の条件が揃えば自動詞の受身文も可能である。Davison は、自動詞をベースとしていても新主語の名詞句が特定の具体的な物を示す場合は、受身文として成り立ちやすいと述べている。また、このような自動詞の受身文は、対応する能動文の意味構造に追加の語用論的意味が付加されていると指摘している。

- (24) *This chair was sat on by John.*

- (25) *This porch was walked on by T. Roosevelt.*

- (26) *The valley has been marched through in two hours.*

Davison は、付加される語用論的意味として3つのタイプを指摘している。第1は、受身文が表す出来事が喜ばしくない場合である。例えば、(24)のようにジョンが座ったことで椅子が壊れたなどの状況があって文が成立している。第2は、(25)のように注目に値する特徴を主語名詞句が持っている場合で、第3は、(26)のように受身文で表される出来事が可能である場合である⁵。

第1のタイプは、日本語において間接受身をはじめ一般的に受身文が被害性の意味を持つという点において類似していると思われる。このような被害の意味を持つ文を以下に挙げるが、これらに完全に対応する日本語受身文はない。

- (27) *That knife has been cut with too often without being sharpened.*

- (28) *This spoon has been eaten with.*

- (29) *Dinner was sat through by all in stony silence.*

(Davison 1980: 45-6)

以上、自動詞の受身を考察したが、自動詞受身そのものは現在まで強調されていた程、非常に特殊であるとは言えないと思われる。日本語の自動詞の受身のように制限が少なく、多くの自動詞が受身文に用いられ、また被害の意を表す点は、かなり珍しいであろうが、英語のように基本的には自動詞の受身構文がないともいわれる言語にも、現実には自動詞受身文が存在することがあり、自動詞ベースの受身文についても研究を進めることが必要であろう。

5 被害の意味

5-1 日本語

第4節で自動詞の受身が被害を表すことがあると述べたが、本節では通言語学の観点から受身文の被害の意味について議論したい。まず、日本語の場合、近年、構文が直接受身なのか間接受身なのかは関係なく、受身主語がその状況にインヴォルヴ（関与）していない場合に被害の意味が表されるという考え方が一般的に受け入れられている（Wierzbicka 1979, Oehrle and Nishio 1981, 久野 1983, 森山 1988, Shibatani 1993, Washio 1993）。このインヴォルブメントという概念は、久野（1983）により提案されたものであり、受身の被害性を説明する際有効であるが、概念そのものの定義も明らかではない⁶。また、ある種の直接受身文が、それと対応する能動文と比較すれば、被害の意味を付加している場合などの説明も十分にできていない。例えば、Howard and Niyekawa-Howard (1976: 210-211) が指摘するように、(30)、(32) の能動文は意味的には中立であるが、(31)、(33) の受身文には少なくとも被害のニュアンスが含まれている。

(30) 親は子供を日本に残した。

(31) 子供は親に日本に残された。

(32) 部長は佐藤を人事課に廻した。

(33) 佐藤は部長に人事課に廻された。

久野（1983: 208）は、以上のような例に対して、「残す」や「廻す」という動詞は半使役動詞であり、自体の意味として、行為の対象にその行為を強制することを含み、それゆえ対象に被害を与える意味を既に持つと説明している。しかしながら、「親は子供にせがまれ、祖父母の所に子供を残した」や「佐藤の強い熱意を認め、部長は彼を人事課に廻した」等と対象の意志をくんで行為が行われる場合も表現できることから、動詞そのものは被害の意味上中立と考えなければならないと思われる。

Klaiman (1987)、増岡 (1987) では、受身の機能に着目し、受影性を表現するタイプの受身文とそうではないタイプ等に分類している。Yoshida (1996) は口語コーパスを調査し、受身のディスコース機能の一つはコミュニケーションを動的に活発化させることであると提案し、その中で表現される出来事はほとんど悪い状況のものであると指摘している。田中 (1997: 64) は、受動文は主語が一方的にある事態に巻き込まれる状況を表し、被害の意味は語用論的含意であると主張する。以上のように、被害の意味については、種々の立場から議論することができる。本稿では、日本語以外の言語現象の例と比較することにより、被害の意味は直接・間接の形や用いられている動詞の意味だけで説明できるものではなく、受身構文そのものに託される機能と見なしたい。

Keenan (1985) は、受身構文の特徴の1つに主語が出来事から良い又は悪い影響を受けることを表現すると述べている。このような特徴は、アジアの言語の中で目立ち、利益を表す場合もあるが、被害を表す受身文の方が多いようである。先に述べた持ち主の受身文(5)から(8)も被害を受ける出来事を表しているが、以下に幾つかの例を挙げる。

5-2 北京語

北京語のbei構文は元来、被害を表す受身構文であった。近年、英語の受身構文の影響を受け、被害の意味を含まない受身文も増えているようであるが(Chen 1994)、(34)のように被害の意味を表すことも多い。

他のアジアの言語にも構文の意味として被害を表す受身構文は少なくない。先に述べたインドネシア語やビルマ語についても同様のことが言える。

北京語

- (34) *Jiǎ nbùzhai de yì dàpiān lǐngtǔ bèi*
地名 の 1つ大きい 領土 受身

yuènnán qī nzhàn-le.
ベトナム 占領する-完了
領土のほとんどはベトナムに占領された。
(Chappell 1986: 1044)

5-3 タイ語・ベトナム語

タイ語・ベトナム語などでは、(35) や (37) のように被害を表す構文が存在し、さらに (36) や (38) のように受益の意味を表す構文が別に存在する。

タイ語

- (35) *Suk thùuk rôt chon.*
スック 車 衝突する
スックは車にひかれた。
(Siewierska 1984: 149)

- (36) *Phom dāaj-ráb chəən.*
私 受ける 招待する
私は招待された。(Noss 1964: 124)

ベトナム語

- (37) *Nam bi nga đánh.*
ナム 受身 ガー 殴る
ナムはガーに殴られた。
(Siewierska 1984: 149)

- (38) *John duoc kim đánh.*
ジョン 受身 キム 殴る
ジョンはキムに殴られた (ジョンが喜んでいる)。
(Siewierska 1984: 151)

その他、韓国語にも主に利益を表す受身構文があるが、通言語学的に被害を表す受身の方が多いのは明らかである (Keenan 1985)。

5-4 英語

Keenan (1985) には指摘されていなかったが、受身が利害の表現として用いられるのは、実際英語にも見られる現象である。以前から英語のget受身文は、中立であるbe受身文に対して口語的であるのみではなく、ある出来事がよい事か悪い事を表すのに用いられると指摘されてきた (Lakoff 1971, Chappell 1980)。

- (39) *John got promoted.*

- (40) *John got fired.*

文脈や動詞の意味によって出来事がよいのか悪いのかが決まり、(39) のように喜ばしい出来事だったり、(40) のように残念な出来事を表したりする。Herold (1986) の調査では、話し言葉の中でget受身文は被害の意味を持つ場合が82%と非常に多いということが明らかになっている。最近ではさらに詳細なコーパス研究が行われ、どの研究も被害の意味で用いられる方が大多数という結果が出ている (Collins 1996, Downing 1996, Yim 1998, Carter and McCarthy 1999)。表1は4つの調査結果をまとめたものである。

またBudwig (1990) は、英語話者の児童が初めに get 受身文を用いる時、児童にとって望ましくない出来事について話す場合であることを指摘した。以上のような先行研究をまとめると、get受身文は基本的には被害を表す構文としてみなしてよいと思われる。

結論として、受身文が被害を表すことは通言語学上の特徴であると考えられる。日本語においても、受身自体が被害を表す機能を持ち、間接受身の被害性はそこから拡張していったものと考えた方が自然ではないだろうか。そうであれば、日本語の間接受身が被害を表すこと自体が非常に特殊であるとは言えないだろう。

表1 英語 *get* 受身の用法分類

著者名	被害	利益	中立	不明	合計数
Collins	196 (67.4%)	68 (23.4%)	27 (9.3%)	0	291
Downing	600 (70.92%)	102 (12.05%)	106 (12.53%)	40 (4.73%)	846
Yim	93 (86.1%)	15 (13.9 %)	17 (13.5%)	0	125
Carter and McCarthy	124 (89.2%)	5%以下	ごくわずか		139

6 おわりに

以上、間接受身に関して(1)持ち主の受身、(2)自動詞の受身、(3)被害の意味という3つの観点から議論を進めてきた。日本語の間接受身は他の言語にある受身表現等と共通点を持ち、日本語だけの現象ではないことは明らかになったと思われる。今後は、例えばインドネシア語等の間接受身と対照研究を行うなど受身構文の現象の理解を深めていきたい。

また、通言語学上、受身構文が存在していても使用頻度が低く、受身の機能が他の構文によって表されることが多い言語も存在を見失ってはならない。例えば、現代スペイン語で受身構文はあまり使用されておらず、主語が影響を受けることを中間構文によって表わす場合が多い。Quesada (1997)によると、コスタリカのスペイン語口語コーパスの中で受身的出来事を表現する場合に、中間構文が69.26%も用いられているのに対し、受身構文はわずか0.89%しか用いられていないそうである。コーパス研究をもとに、受身構文が実際にどのように使われているかということについての英語学の研究も増えている。日本語に関しても緻密な調査が必要であろう。

注

1. 「通言語学」とは、cross-linguistic study を意味する。他の日本語訳で「比較言語学」も使われるが、同系等のみの言語研究を指す場合もあるので、本稿ではこの訳を用いる。
2. 以下提示される例文は、母語話者から直接例文を

得られず参考文献を引用した場合、参考文献にできるだけ忠実な表記を用いている。但し、特殊なフォントが用いられている場合は、それに近いもので代用している。

3. 受身文の被害の意味は第5節で取り扱うが、詳しい研究については、Oehrle and Nishio (1981)、寺村 (1982)、久野 (1983)、Wierzbicka (1988)、田中 (1997) 等を参照のこと。
4. 筆者が数人のベトナム語話者に確認した。
5. 受身文に可能の意味が含まれることは、他の言語にも多く見られる。(Davison 1980, Shibatani 1985)。日本語でも受身も可能も「られ」で表される。
6. 例えば、心理動詞 love、admire、dislike などではインヴォルブしているのに対し、知覚動詞 see、hear などはインヴォルブされていないとするのは問題である。

参考文献

- 金水敏 (1993) 「受動文の固有・非固有性について」『近代語研究』第9集 武蔵野書院 p.476-508.
- 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』大修館
- 柴谷方良 (1997) 「言語の機能と構造と類型」『言語研究』112号, p.1-31.
- 高見健一・久野暉 (2000a) 「日本語の被害受身文と非能格性【上】」『言語』29巻8号, p.80-91.
- _____ (2000b) 「日本語の被害受身文と非能格性【中】」『言語』29巻9号, p.80-94.
- _____ (2000c) 「日本語の被害受身文と非能格性

- 【下】『言語』29巻10号, p.70-88.
- 田中裕司 (1997) 「日本語受動文の被害性について」
『日本言語学会第115回大会予稿集』 p.59-64.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』
くろしお出版
- ニラタワット, ミンミット (1980) 「受身と使役の表
現の日・タイ・英語の対照研究」『日本語教育』
40号, p.121-128.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法 日本語文法序説』く
ろしお出版
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書
院
- 湯浅章子 (2000) 「日本語, インドネシア語対照に基
づく受動態に関する一考察—「第三者の受身—
は有標か」『K L S』20, p.12-21.
- 鷺尾龍一 (2005) 「受動表現の類型と起源について」
『日本語文法』5巻2号, p.3-20
- Budwig, Nancy (1990) The linguistic marking of
nonprototypical agency: An exploration into
children's use of passives. *Linguistics* 28,
p.1221-1252.
- Carter, Ronald, and Michael McCarthy (1999)
The English *get*-passive in spoken discourse:
description and implications for an interper-
sonal grammar. *English language and lin-
guistics* 3.1, p.41-58.
- Chappell, Hilary (1980) Is the *get*-passive adver-
sative? *Papers in linguistics* 13, p.411-452.
- Chen, Lilly Lee (1994) The origin of adversative
passives. *BLS* 20, p.113-124.
- Collins, Peter (1996) *Get*-passives in English.
World Englishes 15, p.43-56.
- Davison, Alice (1980) Peculiar passives.
Language 56, p.42-66.
- Downing, Angela (1996) The semantics of *get*-
passives. In Ruqaiya Hasan, Carmel Cloran,
and David Butt (eds.) *Functional descrip-
tions: Theory in practice*. Amsterdam: John
Benjamins. p.179-205.
- Givón, T, and Lynne Yang (1994) The rise of the
English *get*-passive. In Barbara Fox and Paul
J. Hopper (eds.) *Voice: Form and function*.
Amsterdam: John Benjamins. p.119-149.
- Hashimoto, Mantaro J (1988) The structure and
typology of the Chinese passive construction.
In Masayoshi Shibatani (ed.) *Passive and
voice*. Amsterdam: John Benjamins. p.329-
354.
- Haspelmath, Martin (1990) The
grammaticalization of passive morphology.
Studies in language 14, p.25-72.
- Herold, R (1986) A quantitative study of the al-
ternation between the *be*- and *get*-passives.
Paper read at the XVth NWAV (New ways of
analyzing variation) Conference, Stanford
University. October 1986 (ms).
- Howard, Irwin, and A. M. Niyekawa-Howard
(1976) Passivization. In Masayoshi Shibatani
(ed.) *Japanese generative grammar, Syntax
and semantics* 5. New York: Academic Press.
p.201-237.
- Keenan, Edward L (1985) Passive in the world's
languages. In Timothy Shopen (ed.)
Language typology and syntactic description.
p.243-281. Cambridge: Cambridge University
Press.
- Klaiman, M. H (1987) Aktionsart, semantics, and
function in the Japanese "passive". *Studies
in language* 11.2, p.401-34.
- Lakoff, Robin (1971) Passive resistance. *CLS* 7,
p.149-162.
- Noss, Richard B (1964) *Thai reference grammar*.
Washington DC: U.S. Foreign Service
Institute.
- Oehrle, Richard T, and Hiroko Nishio (1981)
Adversity. *Coyote papers: Working papers in
linguistics from A → Z* 2, p.163-85.
- Park, Jeong-Woon (1994) *Morphological*

- causatives in Korean: Problems in grammatical polysemy and constructional relations*. UC Berkeley dissertation.
- Quesada, J. Diego (1997) Obituary: adios to passive in Spanish. *La linguistique* 33, p.41-62.
- Shibatani, Masayoshi (1985) Passives and related constructions: A prototype analysis. *Language* 61, p.821-848.
- (1990) *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Siewierska, Anna (1984) *The passive: A comparative linguistic analysis*. London: Croom Helm.
- Tsuboi, Eijiro (1997) Cognitive models in transitive construal in the Japanese adversative passive. In Ad Foolen and Frederike Van Der Leek (eds.) *Constructions in cognitive linguistics*. Selected papers from the fifth international cognitive linguistics conference. p.283-300.
- Washio, Ryuichi (1993) When causatives mean passive: A cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian linguistics* 2, p.45-90.
- Wierzbicka, Anna (1988) *The semantics of grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Yim, Boki (1998) A contextual analysis of the get-passive in spoken American English. UCLA MA thesis.
- Yoshida, Eri (1996) A discourse study of passives in Japanese conversation. UCLA dissertation.